

特別賞 青年海外協力協会賞

再利用を心がけてゴミを減らそう

高岡市立五位中学校 三年 橘 大輔

僕の叔父はスーパーのレジ袋を作っている会社に勤めている。社員十人とパートのおばさんたちが働いている小さな会社だそう。その叔父だが、最近元気がない。マイバック運動が浸透してきたとかで、会社の売り上げが落ちているらしい。叔父は今年で四十八歳。転職するには厳しい年齢だと母が話していた。

追い打ちをかけたのが、レジ袋有料の報道だ。ゴミの減量のためにレジ袋の料金をお客が負担することになる。

ゴミの問題は切実だ。このままゴミが増えていけば全国の処理場はあふれてし

もう日がそう遠くない将来に訪れるだろう。そのときになって慌てても遅い。ゴミを少なくする工夫を僕たちはしなければならぬ。

しかし、ゴミを減らすということは、今まで使っていたものを使わなくなるということだ。無駄遣いはいけない行為だが、使わなくなってしまうものを作っている会社で働く人々のことも考えなければいけない。

レジ袋を使わなくなることゴミは少なくなるだろうが、レジ袋を作っている会社の人たちはどうなるのだろうか。大きな会社ならば、ほかの製品を作るようになるのは容易だろう。しかし、叔父が勤めているような小さい企業は、すぐにほかの製品を作るというわけにもいかない。新しい取引先を探すのに時間も人手もかかる。会社は規模を縮小するか、倒産してしまうかもしれない。

最近我が家では、レジ袋をゴミの袋として活用している。叔父を思いやつてのことだが、ちよつとした工夫で大きなゴミ袋を使わなくてすむようになる。たとえば紙バックに入った牛乳やウーロン茶。飲み終わったら側面をつぶして、クルクルと丸めれば小さくなる。肉や魚の入ったパックも軽く水洗いをして、はさみで切るとかさばらない。少し手間をかければゴミはかなり圧縮できる。ゴミでいっぱいなのレジ袋を持つと重い。

レジ袋を何かに利用できないだろうかと考えないから、ゴミになる。しかし、いろいろと工夫をすればレジ袋も、ゴミ袋に早変わりする。ほかにも活用方法があるかもしれない。みんなでいろいろな方法を考えれば、ゴミだったものが製品として利用できるようになる。

ゴミの減量の一環として、レジ袋の有料化がある。環境の問題を考えると当然のことだろう。しかし、僕たちはそのために犠牲になる叔父のような人たちの存在を忘れてはならない。

環境と製造の調和を考え、どうすればみんなが幸せになれるかを考えていくべきだと思う。作る人たちも困らない、環境を守る、難しいがその二つを両立させるのが、二十一世紀に生きる僕たちの宿題だと思う。

法律を守って、まじめに働いている人が犠牲になつての環境対策であつてはならない。